「よそ者目線」から障害考える

「表現未満」の個性と尊重

浜松の施設に通った報告書　福島の元報道記者執筆

浜松市内で知的障害者施設を運営するNPO法人クリエイティブサポートレッツ（浜松市中区）が、報告書「ただ、そこにいる人たち　小松理虔さん 表現未満、の旅」を出した。執筆者の小松さん（四〇）＝福島県いわき市＝が昨年五月から今年二月まで月一回施設に泊まり、障害者と過ごす中で感じたこと、考えたことを気ままに書き連ねた。（勝間田秀樹）

小松理虔さん

小松さんは福島テレビの元報道記者。二〇一一年の東電福島第一原発事故後は海洋調査を手がけ、一八年に出した「新復興論」で、第十八回大仏次郎論壇賞を受賞した。現在はフリーライターとして食や医療、福祉を取材する。

レッツの久保田翠理事長が、小松さんが「新復興論」の中で、原発事故は一生つきあう障害のようなものと表現したことに興味を持ち執筆を頼んだ。

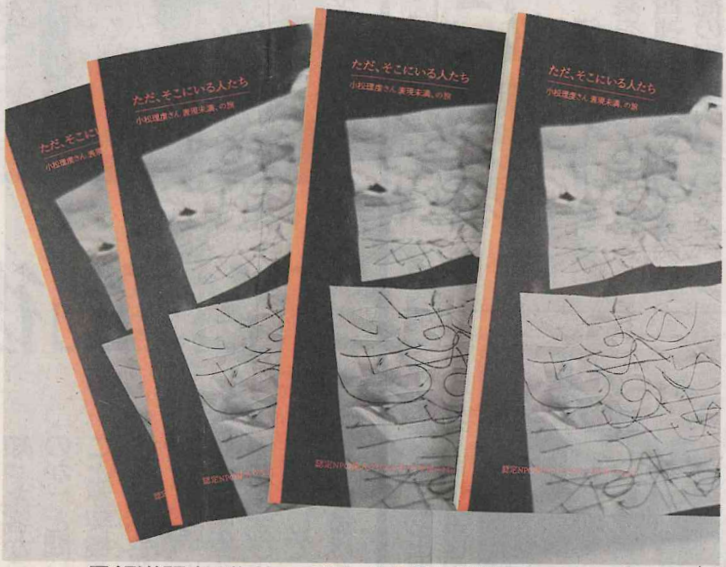
小松さんはレッツにいる障害者が「存在することが、ただただシンプルに許され」ながら、個性豊かに過ごす様子を、驚きや葛藤、楽しさを交え「よそ者」の目線でつづっている。

同じ時間を過ごす中で、世間では迷惑行為とみなされかねない障害者の行動を、アートやパフォーマンスの一歩手前にある「表現未満」という名の個性だと思うようになったという。

一方で実際の社会は、人の役に立ち、経済的に価値ある存在でなければ、「ただ、そこにいる」ことさえ簡単には許されない生きにくさに覆われていることにも気付いたという。

小松さんは「前だったら『うるせーな』とうとましく思ったネット右翼の行動にさえも、私自身『何が背景にあって、そういう行動に出るのか』とまず相手のことを考えるようになり、寛容になった気がする。今回の報告書が、ぎくしゃくした世の雰囲気を和らげる一助になれば」と話す。

報告書は、新書サイズで二百十九ページ。文化庁の「障害者による文化芸術活動推進事業」の助成を受けた。レッツに二百部ほどあり希望者に分ける。問053（451）1355



元報道記者が浜松の障害者施設に通い、感じたことをつづった報告書「ただ、そこにいる人たち」